

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年8月21日現在

機関番号：32102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011年度～2012年度

課題番号：23730439

研究課題名（和文）

公正価値会計の普及に関する批判的・社会学的研究

研究課題名（英文）

Critical and Sociological Study on the Diffusion of Fair Value Accounting

研究代表者

岡本 紀明（OKAMOTO, Noriaki）

流通経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：00433566

研究成果の概要（和文）：

本研究は、制度や実践としての公正価値会計がいかに普及してきたのか、批判的かつ社会的に考察することを目的とするものであった。まず公正価値会計に関する制度（会計基準等）に着目し、その普及・拡大が近年大きく進展してきた点を浮き彫りにした。さらに、実際に公正価値会計の現場で何が行われ、どのような問題点があるのか、特に金融危機時における状況を参考に考察を進めた。その結果、特に金融危機時に市場が普通ではない状況下における、複雑に仕組まれた金融商品の公正価値会計に関して、モデルやソフトウェアやデータベースに頼らざるを得なかった理由から、十分に必要な情報が市場で共有されていなかった問題点を指摘した。この点は制度的枠組みとして、何らかの対処が必要であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to analyze the diffusion of fair value accounting from the critical and sociological viewpoint. The result of this study is summarized as follows. Firstly, it points out the case that the institutional diffusion of fair value accounting has gained momentum in recent years. Secondly, it reveals that fair value accounting in practice, despite its institutional development, might have problems in an unusual market condition. In particular, under the financial crisis in a few years ago, relevant information for fair value accounting of esoteric financial instruments was unevenly limited to a number of financial institutions and some market information vendors. This study argues that this issue has to be seriously considered by regulators.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：会計学

科研費の分科・細目：財務会計、国際会計

キーワード：公正価値会計、金融危機、国際財務報告基準、金融社会論、金融市場の社会学、分散認知

1. 研究開始当初の背景

研究開始時点では、公正価値会計が普及するプロセスの解明及びその理論的考察に力点を置くつもりでいた。研究の当初段階では、その普及のプロセスがある程度把握でき、かつ社会学的理論もしくは制度論の観点からそのプロセスを説明できると考えていた。

だが研究を進めるにつれて、そもそも公正価値会計が実務の現場でどのように適用されているのか、実務実態（実践）に関する分析が必要であると痛感した。そのため、公正価値会計の普及については調査を継続するとともに、公正価値会計の実践的・実務的課題の考察の重要性（特に金融危機時における）にも注目して研究を進めることにした。

2. 研究の目的

リーマンショック後の金融危機を経た現在でも、公正価値会計はその是非が会計学の領域で激しく議論されている。公正価値会計が景気循環増幅効果（procyclicality）を持つため、公正価値会計が金融危機の元凶の一つであったと非難する意見も見られる。このように喧々諤々の議論が交わされる公正価値会計を斬新な視点から捉える本研究は、今後の公正価値会計に関する研究の進展や制度の構築に対して、何らかの示唆を与えて貢献することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の斬新なアプローチとして特に強調したいのは、公正価値会計を批判的に考察し、社会学的な理論から分析しようとする点である。従来の関連研究の多くは、どちらかというと各々の論拠に基づき、公正価値会計を否定もしくは肯定的立場から捉えて論じる傾向があったように思われる。本研究ではそういった傾向とは一線を画した視点を導入した。本研究が特に依拠した先行研究は、会計学者ではなく、社会学者や人類学者らによる学際的な金融（ファイナンス）に関する研究であった。後述するように、こういった研究は近年欧米で台頭してきているけれども、わが国でその点に着目して研究をしている研究者は皆無に近いと思われる。本研究期間中、研究代表者はそのような研究が盛んに行われている英国エジンバラ大学に在外研究拠点を置き、共同研究を行う機会を得て、様々な研究方法に接する機会を得た。本研究

の端々にもそれは活かされている。具体的に、本研究は学際的な観点に基づき、特に実務的な観点から書かれた書籍等を参考に文献研究を進めるとともに、米国における金融危機後の判例の詳細情報にも依拠している。

4. 研究成果

【全体の研究成果】

以下に示すように、本研究は和論文1件、査読付き学会発表3件及び翻訳書1件の合計5件の成果に結びついている。その中でも、以下の説明でも示しているように、特に研究の過程で参考にした金融社会論（social study of finance）の研究を体系的にまとめた訳書『金融市場の社会学』を出版する機会を得られた点を強調したい。

【1. 訳書『金融市場の社会学』の出版】

従来、金融市場を対象とした研究は経済学に依拠したものが多く、ある程度モデルとして定式化される市場の存在を前提としてきたように思われる。果たして、その前提は正しいのだろうか。実は、金融市場は中身がよくわからないブラックボックスで満ちているのではないだろうか。本書はこのような問題意識のもと、金融市場におけるヒトやモノの細部を入念に分析すべく、金融市場（LIBOR やデリバティブ及び裁定取引など）とその関連領域（企業における利益の測定や排出量取引）に関する事例研究・インタビュー調査・参与観察から構成される。

著者のドナルド・マッケンジー教授（エジンバラ大学）は、科学社会学の領域では有名なエジンバラ学派を代表する人物であり、現在脚光を浴びる金融社会論（Social Studies of Finance）の第一人者でもある。本書の斬新かつ学際的な視点は、リーマンショックに端を発した金融危機やLIBORの形成をめぐる昨今の問題を考える際にも極めて示唆に富む。

非常に学際的な本訳書であるが、社会学と金融（ファイナンス）・会計学のインターセクション新たな研究機会を求めようとする研究者にとっては、少なからず参考になると思われる。

【2. 金融社会論に基づく会計研究の可能性の探求】

以下に示すように、「金融社会論の台頭と会計研究への示唆」と題した研究論文を作成し、金融社会論の要点を素描して紹介するとともに、それが将来の会計研究に対していかに貢献し得るか考察を試みた。

【3. 公正価値会計の複雑化を分析する視座としての分散認知の観点の導入】

以下に示すように、「Distributed Accounting Valuation—Alternative View on Fair Value Accounting from the Distributed Cognition Perspective」や「Distributed Cognition and Collective Commitment for the Fair Valuation of Financial Instruments」と題した研究成果を特に国際学会において報告（またはこれから報告予定）した。

この研究は、公正価値会計に不確実性の見積もり等がますます導入され、その評価が主観的かつ複雑になっている点に着目し、それに伴う課題やその改善点に対して、学際的な考察を加えようとするものである。分散認知（distributed cognition）の理論は、認知科学のみならず、社会学や人類学等でも広く援用されており、特に複雑な業務を集団で行う際に、各業務担当者の認知過程がモノやヒトなどに分散する過程を説明する際に用いられる。これをますます複雑化する公正価値会計のプロセスに適用したのが上記の研究である。まだまだ精緻化が必要な研究であるが、これまで複数の国際学会において査読を経て報告する機会を得ている。最新の改訂済み論文は、本年11月にケンブリッジ大学で開催される The 13th FRAP - International Research Conference on Finance, Risk and Accounting Perspectives にて報告する予定である。当国際学会における報告は人気が高く、200超の論文のアブストラクトが提出され、報告の機会が得られたのは90程度であり（採択率46%、ホームページ上で公表）、当該研究が国際的な査読者より、一定の評価を得ていることを示している。

今後もこの研究の精緻化を図っていきたいと思っている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

岡本紀明（2013）「金融社会論の台頭と会計研究への示唆」『流通経済大学論集』第47巻第4号、49-60頁（査読なし）。

〔学会発表〕（計3件）

Okamoto, N. (2013), "Distributed Accounting Valuation—Alternative View on Fair Value Accounting from the Distributed Cognition Perspective," The 36th Annual Congress of European Accounting Association, Paris-Dauphine University. (査読あり)

Okamoto, N. (2012), "Distributed Fair Valuation—Alternative View on Fair Value Accounting from the Distributed Cognition Perspective," The 10th Interdisciplinary Perspectives on Accounting Conference, University of Cardiff. (査読あり)

Okamoto, N. (2013, proposal accepted), "Distributed Cognition and Collective Commitment for the Fair Valuation of Financial Instruments," The 13th FRAP - International Research Conference on Finance, Risk and Accounting Perspectives, Cambridge University. (査読あり)

〔図書〕（計1件）

ドナルド・マッケンジー著、岡本紀明訳（2013）『金融市場の社会学』流通経済大学出版会（査読あり）。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.rku.ac.jp/nokamoto/content/kenkyu.html>（流通経済大学のホームページ上の「教員紹介」のページからもリンクあり）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 紀明 (OKAMOTO, Noriaki)

流通経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：00433566

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：